

## トルコとイスラーム文化

<sup>1</sup> 松島成多 <sup>1</sup> 三尾真琴 <sup>2</sup> 小林和生<sup>1</sup> 帝京科学大学総合教育センター <sup>2</sup> 帝京科学大学生命科学科

Significance of Turkey and Islamic Culture

<sup>1</sup> Shigekazu MATSUSIMA <sup>1</sup> Makoto MIO <sup>2</sup> Kazuo KOBAYASHI

Key Words : トルコの歴史、イスラーム、世俗主義、東京モスク

## 1. トルコ研究のきっかけ

われわれ日本人にとって中東地域は、歴史的にも文化的にも地理的にも遠い存在といえるかもしれない。一方、中東イスラーム文化圏からのニュースは衝撃的なものも少なくない。例えば、2013年1月イスラーム武装勢力がアルジェリアのイナメナス天然ガス関連施設を襲い、建設に当たっていた日本人10人が犠牲となった事件をはじめ、長期化するシリアの内戦、エジプト革命やチュニジアのジャスミン革命後の社会混乱、アフガニスタンのタリバン問題、解決の糸口が見いだせないパレスチナ問題、など混乱と流血のニュースに驚かされる。

なぜこのような混乱が中東地域で起きるのだろうか。そこは、イスラーム信者（ムスリム）が多いイスラーム文化圏とされるが、イスラーム文化とはどういうものだろうか、このような素朴な疑問がイスラーム文化の研究を始めるきっかけであった。

そこで、2013年8月から本学内にイスラーム研究会を発足させ定期的に研究会を持つことになった。

しかしイスラーム文化といってもあまりにも範囲が広い。そこで、まず日本になじみの深いトルコ共和国

の政治・経済・文化に研究の対象を絞り、トルコの教育制度を長年研究してきた三尾を座長にして、トルコとイスラーム文化を研究していくことにした。

この小稿は、イスラーム研究会のメンバーが研究の基礎として共通に認識しているところを要約して報告するものである。

## 2. 東京モスクを訪問

2013年12月我々3人は、「百聞は一見にしかず」と小田急線代々木上原にある東京モスクを訪問した。円形のドームと高い尖塔（ミナレット）を持つ美しいモスクである。室内に入ると1階の集会場所などに使われる大きい部屋に案内された。ここで毎年断食月（ラマダン）に300人の夕食が振る舞われるという。2階は礼拝所で、高いドームの中央に巨大なシャンデリアが取り付けられ、天井や壁はアラベスク模様で飾られ、男性は2階、女性は3階に分かれ、1日5回の礼拝が行われる。ちょうど午後5時前からの祈りの時間で、導師が澄んだよく響く声でコーランの一節を朗詠し、敬虔な信者がこれに合わせて頭を絨毯につけて祈りを捧げ、ついで立ち上がる礼拝の所作を繰り返した。最後には信者がお互いに握手して帰路についていった。

ここで見聞したのは、①ムスリムは神アッラーに対してきわめて敬虔であること、②一人一人神と直接結びつき、それ故ムスリム同士はすべて対等で平等であること、③コーランを読み上げる声は心を震えさせる響きを持つ特有の宗教音楽のようであること、④富める者は貧しい者に喜捨を行い、相互扶助・連帯意識が強いこと、⑤イスラームの中に武装闘争を容認するようなにおいては全く感じられないこと、⑥男性と女性の礼拝所が異なり、女性はベールをつけて礼拝すること、などであった。





その後新宿に出て、本場の味と評判のトルコ料理店で歓談した。アナトリアのワインや豆のスープ、羊肉を中心としたドネルケバブ（肉を回転させながら焼き、それをカットしたもの）やシシケバブ（串に刺した焼肉）などを楽しんだ。

### 3. 現在のトルコ

現在のトルコ共和国は、2012年の年央推計人口は約7,518万人で、EUで最大のドイツに次ぐ規模であり、フランスやイギリスよりも多い。人口は毎年100万人程増えていて、平均年齢30歳と若い国である。面積は78万3,562平方km<sup>2</sup>で日本の約2倍ある。2012年の一人当たりGDPは1万525ドル（為替レート換算）で、2013年の潜在成長率は3.6%と見込まれている。もっとも消費需要が旺盛なため経常収支は構造的に赤字である。EU加盟を交渉中だがまだ加入されていない。そこには「西欧キリスト教社会との文化的相違」、「キプロス問題」、「クルド人への人権問題」などトルコの文化や歴史がかかわっている。

日本との関係では、1889年トルコのエルトゥール1号が和歌山県沖で台風のため座礁した際、地元の人たちが懸命に救助活動をしたことが知られて

おり、親日国といわれている。実際、1980年に勃発したイラン・イラク戦争の折、イラン脱出に窮した日本人215名はトルコ政府が手配した救援機によって危機を脱することができた。

日本はボスボラス海峡をつなぐ鉄道網の整備に協力し、日本の企業連合が原発を受注し、現在日本の企業100社程度がトルコに進出している。

2014年1月、安倍総理はトルコのエルドアン首相と就任後3度目の首脳会談を行った。日本政府も、トルコは順調な経済成長が続き消費の拡大が期待され、中央アジアなど周辺国を含む巨大市場のカギを握る国として注目しているようである。

### 4. トルコとイスタンブール

- (1) トルコ最大の都市イスタンブールは魅力的な街である。目の前には黒海とエーゲ海とをつなぐボスフォラス海峡が輝いている。トプカプ宮殿、ブルーモスク、アヤソフィアなど歴史的建造物が建つ旧市街は世界遺産に指定され、住人に混じって観光客やビジネスマンが目立つ。モスクからは礼拝を呼びかけるアザーンの声が流れ、グランドバザールでは様々な店が客を呼び込んでいる。そこは異国情緒にあふれ、顔立ちの異なる男たちや色とりどりのベールを纏った女性たちで活気に満ちている。ボスフォラス海峡には船が行き交い、2本の吊り橋が架けられ、ごく最近開通した地下鉄も兩岸をつなぎ、まさにヨ-ロッパとアジアをつなぐ文明の十字路となっている。
- (2) イスタンブールは、BC667年「ビュサス」が集落を作りビザンティオンと呼ばれたが、AC196年にローマ皇帝セプティミウス・セウェルスがここを占拠した。AC324年ローマ皇帝コンスタンチヌス1世がローマからここに遷都し、コンスタンチノポリスとよばれるようになる。以来歴代のローマ帝国皇帝が防壁、広場、教会、宮殿、修道院、公衆浴場、大路などを建設・整備した。395年ローマ帝国は2人の息子に分割され、西ローマ帝国は476年にゲルマン人の傭兵オドアケルによって滅ぼされたが、ここ東ローマ帝国（ビザンティン帝国）はその後も発展し、最盛期はユスティニアヌス法典を編纂した皇帝ユスティニアヌス1世の頃（6C）といわれる。
- (3) 1204年にヴェネチア総督が率いる第4回十字軍がコンスタンティノブルを攻撃した。略奪

によって一時廃墟となり、その後奪還したがビザンティン帝国は衰退の一途をたどった。1453年小アジア半島（アナトリア）で勢力を伸ばしたイスラーム国家オスマン朝のスルタン、メフメト2世が難攻不落のコンスタンティノープルを包囲した。ボスフォラス海峡につながる金角湾には往来止めの鎖が張られたが、オスマン艦隊は油を塗った板を敷いて船を山越えさせ、幅30メートルに及ぶ3重の城壁を破るために長さ8メートルに及ぶ巨砲を製作させ30台の車に乗せ60頭の牛と400人を動員して現地に運んだという。54日間の包囲・攻撃によってついにコンスタンティノープルは陥落し、ここにビザンティン帝国は滅亡した。

- (4) メフメト2世は、オスマン帝国の首都をコンスタンティノープルに移し、宮殿、グランドバザール、モスク等を建造してイスラーム都市に改造した。その後もオスマン帝国は周辺地域を攻略して版図を広げ、コンスタンティノープルはその交易の中心地として繁栄した。
- (5) しかし、盛期をすぎたオスマン帝国は次第に衰退していく。1571年にレバント沖で敗戦し、1699年にはハプスブルク帝国にカルロビッツ条約でハンガリーを割譲した。その後もスルタンの支配の実権は官僚に移り、支配階級の腐敗・浪費、軍事費の増大などで財政が行き詰まる。また工業化の遅れから西欧への経済的従属がすすむ。そこで西欧化による改革をしようと1839年ギュルハーネ勅令などのタンズィマート（再編成）が行われたが、かつての栄光を取り戻すことができなかった。
- (6) オスマン帝国は、第1次世界大戦でドイツ・オーストリア側に参戦して敗戦したことで、最大の危機を迎える。1918年連合国軍がイスタンブールを接收し、1920年スルタン・メフメト6世は戦勝国の言いなりになって「セーブル条約」を締結した。またアナトリアもギリシャ軍や建国を目指すクルド人勢力などによって奪われそうになった。

この祖国の危機に遭遇して、オスマン帝国の軍人であったムスタファ・ケマル・パシャ（アタチュルク、トルコ憲法に「創設者にして永遠の指導者、比類なき英雄」とある）が1920年祖国の解放と独立のためアンカラ政府を樹立し、仏、英、伊、ギリシャの軍隊と戦って撤退させ、1920年ムダニア休戦協定を締

結した。アタチュルク（「トルコの父」の意）はスルタン制度を廃止した。その結果、メフメト6世は亡命し、カリフを継いだ弟も逃亡した。アタチュルクはセーブル条約を破棄し、新たに1923年ローザンヌ条約を締結してトルコ共和国が誕生した。アタチュルクは、原則としてイスラームの教義や伝統を廃棄し、西欧合理主義に基づいて近代化した民主主義国家を作ること（世俗主義）を目指し、1924年にトルコ共和国憲法を制定した。

- (7) 1938年にアタチュルクが死ぬと、大国民議会は、アタチュルクの忠実な副官であったイスメット・イノニュを第2代大統領に指名し、イノニュはアタチュルクの「共和人民党」の一党支配を引き継いだ。しかし第2次世界大戦前後の混乱の中で、国民発展党、民主党、社会公正党が結成され共和人民党の一党支配体制が崩れた。これらの党はイスラームという宗教を含むトルコ民族の伝統と誇りをうたい、世俗主義の修正を求めた。1950年の選挙では、政権は民主党に移り、その政策は「イスラームの復活」と評された。
- (8) 1960年、アタチュルクの信奉者である軍がクーデターを起こし、大統領バヤル、首相メンデレスらの民主党幹部の身柄を拘束した。クーデター後イノニュを首班とする共和人民党内閣が成立し（第2共和制）、世俗主義が国是として承認された。しかし、1965年の選挙で公正党のスレイマン・デミレル党首が政権を握り、その後政治的混乱と社会不安が広がった。1971年、軍は、アタチュルクの精神がないがしろにされているとし、政治家が党利党略を捨て改革に努めなければ軍は憲法に定められた義務を遂行する、との書簡を送ったのでデミレル内閣は総辞職した。
- (9) 1970年代後半になると、政治・経済が混乱し、社会不安が増大した。また、エルバカンを党首とするイスラーム政党である国民救済党が公然とアタチュルク批判を開始した。そこで1980年、軍が「民主主義を取り戻す」としてクーデターを敢行し、左翼など3万人を逮捕した。この1年後に政権議会が開かれ1982年に「世俗的で一体的なトルコ国民国家」を目指す憲法改正が承認された（第3共和制）。
- (10) 1983年民政移管後の選挙では、軍部の期待に反し、トウルグット・オザルの母国党が多

数を占めた。オザルは経済・財政の再建に取り組んだが同時にイスラーム支持派でもあった。軍は、これに妥協し「アタチュルクの世俗主義はイスラームの信仰を否定するものではない」とし、1982年の憲法にも信教の自由が記載された。

- (11) 1995年の選挙でイスラーム政党「繁栄党」が第1党となりレジェップ・タイイ・エルバカンが組閣した。エルバカンはイスラームの復活を目指したため、1997年世俗主義の保護者と自認する軍によってエルバカンは逮捕され、繁栄党は解党された。2001年にイスラーム政党の流れをくむ「公正発展党」が作られ党首に現在の首相レジェップ・タイイプ・エルドアンが就任し、2002年の総選挙に勝利した。しかしエルドアンはイスラームをたたえる演説をして有罪となり被選挙権を停止されていたため、副党首のアブドゥウラ・ギュルが首相に就任した。公正発展党は、軍部の介入をおそれ、イスラーム体制を目指す政党でなく、保守的民主主義政党だと宣言した。しかし、2003年に被選挙権を回復して首相となったエルドアンは、大学構内でのスカーフ着用禁止（公的領域でのスカーフ着用はイスラームの象徴であった）を撤廃する憲法改正を2008年に成立させた。また2010年の憲法改正ではクーデターを起こした軍人を一般法廷で裁くこと、裁判官などの任命権を議会や大統領が持つことなど軍部や司法当局の権力をそぐことを主眼とした憲法改正を国民投票によって成立させ、軍部の暴走を押さえることに成功したといわれている。

## 5. イスラームの信仰と行動様式

イスラーム社会を論ずるためには、イスラームの理解を欠かすことはできない。以下、イスラームの概要を見ておこう。

- (1) イスラームの開祖ムハンマド（570～632年）は、アラビア半島の都市マッカ（メッカ）の支配階級クライシュ族に生まれ、幼くして父母を亡くし祖父と伯父に育てられた。25歳の時15歳年上の富裕な未亡人ハディージャと結婚し、娘4人と男1～2人をもうけ、貿易商の総支配人として活躍した。ハディージャの死後も数人の女性と結婚した。ムハンマドが40歳ころマッカ郊外のヒラー山で瞑想したところ突然大天使ガブリエルが現れ、神アッラーの啓示を受けられた。
- (2) イスラームが守るべき規範の第1が、ムハンマドが何度か受けた啓示をムハンマドの死後まとめた聖典「クルアーン（コーラン）」である。これは114章からなり、「神の声」としてムスリムが日常生活において守るべき戒律が具体的に細かく定められている。第2が、一般信徒が予言者ムハンマドの言動を収集し編纂した「ハディース」である。そこにはトルコの大拡張当時のアラブの各地の伝統・慣習法が編纂されている。そして第3が、クルアーンを解釈するイスラーム法学者の一致した意見（イジュマ）で、第4が客観的な推論（キヤース）である。
- (3) イスラーム的な思考は、常にクルアーンとハディースをもとにする。日常生活で何か問題が起こると、イスラーム法学者が、クルアーンを引き合いに出して、その解釈を定めてきた。
- 例えば、次のような解釈が敬虔なムスリムの生活規範になっている。
- ①豚は不浄な動物とされ、肉を食べてはならない。牛肉、羊肉は食べてよいが、絞殺や扼殺された肉を食べることは禁止され、神の名前を唱えながら屠殺された肉（ハラール肉）は食べてもよい。
- ②クルアーンの中に「女性は陰部あるいは体の美となるところを覆い隠せ」との教えがあるため、成人ムスリムはスカーフやベールを着用する。
- ③婚姻は花嫁の法的保護者（父）と花婿との契約である。契約の中には、結納金、結婚式、夫が二番目の妻をめとったときの妻の離婚を宣言する権利などが決められる。結婚相手はそれぞれの家庭を通じて決められる。もっともこのような伝統は次第に行われなくなっている。
- ④ムスリムは一般に異教徒との結婚が許されず、男女ともイスラームに改宗することが求められる。またイスラームでは4人までの妻帯が許される。これはムハンマド時代に夫が戦死した未亡人を救済するためと、ムハンマドが数人の妻を持っていたことによる。離婚は証人の前で夫が妻に「離婚する」と3回宣言すれば離婚できる。
- ⑤殺人には死刑が科される。強盗などの犯罪



にも非常に厳しい刑が科される。不倫も罰せられる。これらは遊牧社会の伝統によるものと理解されている。

⑦人は利他的に振る舞い、社会に有害な活動を慎み、貧者に寛容になることが求められる。人は勤勉に労働し(浪費が禁止される)、社会を破壊するような経済競争を行わず、公正な価格を設定し、債務の支払いを誠実にやり、投機やギャンブル・買占めなど不道德な経済活動を行ってはならない。

⑧財産は神によって与えられたもので、死とともに神に返される。相続の方法はクルアーンの解釈によって決められており厳格に実行されなければならない。夫が亡くなり妻と娘、息子がいると、その相続分は妻 3/24、息子 14/24、娘 7/24 となる。

(4) イスラームの教義は六信と五行に要約される。六信とは、神、天使、啓典、預言者、来世、天命を信ずることである。

五行とは、ムスリムが守るべき次の五つの行いをいう。

①信仰告白(シャハーダ) — 「アッラーの他に神はない。ムハンマドはその使徒である」と唱える。

②礼拝(サラア) — 一般に1日5回、夜明け、正午、午後、日の入り、夜に、マッカ(メッカ)のカアバ神殿の方向に向かって礼拝する。礼拝は手、口、顔、足を洗い、コーランの一節をとえ床に額をすりつけるほどひれ伏すことを繰り返す。毎週金曜日の正午にはモスクの尖塔(ミナレット)から流れる礼拝への呼びかけ(アザーン)に応じて導師(イマーム)の指示に従って集団礼拝する。女子は男子の後ろで行うか、女性専用の部屋で礼拝する。

③喜捨(ザカート) — 貧者や孤児などのために財産の一定割合を喜捨しなければならない。現在、喜捨は多くの国で租税に転化している。

④断食(サウム) — イスラーム暦の断食月(9月)には、日の出から日没まで飲食を含んだ一切の快楽を断つ。

⑤巡礼(ハッジ) — メッカにある聖地カアバ神殿など預言者ムハンマドがたどった行程を一生のうち一度は行うのがムスリムの義務である。

## 6. トルコの基本的国家体制

(1) 1924年に作られた(その後若干の改正を受けた)トルコ共和国憲法は、イスラームを廃止し西欧型近代化(世俗主義)を目指し、次のような内容を持っている。これが現在のトルコの基本的な国家体制となっている。

①「宗教的感情を国事行為および政治に決して関わらせてはならない」とする世俗主義を基本原理として掲げるが、宗教的自由は保障される。世俗主義とイスラームとの調和のため、憲法第24条は「すべての個人は、良心、宗教上の信仰および見解の自由を有する」とする一方、宗教および道德教育は国家の後見および監督の下で行われるものとし、「…何人も、国家の社会、経済、政治、または法的基本秩序を部分的であっても宗教原則に依拠させ、または個人的な利益あるいは影響力を保全するために、…宗教または宗教的感情、あるいは宗教上神聖とされるものを濫用し、悪用してはならない」と定める。

②「主権は無制限かつ無条件にトルコ国民に帰属する」として国民主権を宣言する。

③憲法と法律が全てに優越する(近代立憲主義、法の支配)。イスラーム法は憲法と法の範囲内でのみ認められる。

④立法権はトルコ大国民議会が持ち、4年ごとに議員の選挙を行う。行政権は大統領および内閣に帰属し、大統領は議会で選ばれる(議員でなくてもよい)。なお、2007年憲法改正で国民の直接選挙で選ぶことになり2014年初めての大統領選挙が行われる。任期は5年で2期就任できるようになった。大統領が首相および大臣を任免する。司法権は独立の裁判所が持つ。シャリーア(イスラーム法)法廷や宗教裁判所は廃止されている。

⑤法の下での平等、基本的権利および自由が保障されている。

## 7. トルコの教育

トルコ共和国はアジアとヨーロッパにまたがり、両文化の影響を受けながら発展してきた。学校教育は、義務教育機関として、1997年に小学校と中学校が統合された8年制の初等教育学校が置かれ、その他、就学前教育機関として幼稚園、高等学校(3

年制と4年制)、大学などが設置されている。初等教育学校を含め大半の学校が国立だが、私立学校も存在する。ただし、私立学校の1ヶ月の学費は一般労働者の月収とほぼ同等であり、経済力により教育を受ける範囲も左右されている。

教員数・教室数など学校教育をめぐる環境は必ずしも十分でなく、初等教育学校は午前・午後の二部制のところも少なくない。また、学校設備も同様で、体育館・プールなどが存在する公立学校は少ない。とくに都市部の学校の運動場は狭く多くはコンクリート張り、バスケットボールやフットサルをする程度の敷地である。また、図書室もそのスペースや蔵書数において不十分である。近年トルコ政府では、これら学校設備・環境の改善に向けて取り組んでいる。

さらなるトルコの学校教育の課題として、女子児童・生徒の就学率の低さがあげられる。現在、男子児童の就学率は統計上ほぼ100%に到達したが、女子児童の非就学者は男子に比べ低下している。その要因の一つとして、家庭の経済事情に加え、保守的なイスラームを奉ずる地域では、男女共学への抵抗や学校内でスカーフ着用を求める親が存在するという事情もある。

## 8. むすび

本稿では、イスラーム研究会のメンバーが共通に認識しているイスラームとトルコの基本を概観したものであるが、どこを取り上げても、長い歴史とその中で生きた人々の思いが詰まっており、現代社会のあり方を深く考えさせるヒントがそこここにあって興味は尽きない。

われわれは、このテーマを引き続き研究して、イスラームやトルコの人々の行動を理解し、ひいては日本人の生き方を考えるのに役立てたいと思っている。

## 参考文献

1. 長場絃：イスตันบูล 歴史と現在の光と影，慶應義塾大学出版会，2005年
2. 牟田口義郎：物語 中東の歴史，中公新書，2007年
3. 鈴木薫：オスマン帝国－イスラム世界の柔らかない専制，講談社現代新書，1992年
4. 杉田英明：浴場から見たイスラーム文化，山川出版社，1999年
5. 内藤正典・坂口正二郎：神の法 VS 人の法，日本評論社，2007年
6. 堀江聡江：イスラム法通史，山川出版社，2004年
7. 新井政美：イスラムと近代化，講談社新書メチエ，2013年
8. 坂本勉：トルコ民族の世界史，慶應義塾大学出版会，2009年
9. 小杉泰：イスラームとは何か，講談社現代新書，1994年
10. 神野正史：世界史劇場イスラーム世界の起源，ベレ出版 2013年
11. 加藤博：イスラム世界の経済史，NTT出版，2005年
12. 菊池達也：イスラムがわかる，成美堂出版，2013年
13. 新井政美：イスラムと近代化－共和国トルコの苦闘，講談社メチエ，2013年
14. 竹下政孝：イスラームの思考回路，栄光教育文化研究所，1995年
15. 地球の歩き方編集室：地球の歩き方，イスตันบูลとトルコの大地，ダイヤモンド社，2013年
16. 渋谷幸子・池澤夏樹：イスตันบูล歴史散歩，新潮社，2012年
17. ハルーン・シディキ：一冊で知るムスリム，原書房，2010年
18. 高崎通浩：民族対立の世界地図，中央新書ラクレ，2002年